

東京パラリンピック大会 (1964年) の 記録映画に関する一考察

—「パラリンピック東京大会」と「愛と栄光の祭典」の内容分析—

崎田 嘉寛 (北海道大学)

A Historical Study of the Tokyo Paralympic Games (1964) Captured by the Documentary Films

— Content Analysis of “Paralympic Tokyo” and “Festival of Love and Glory” —

SAKITA Yoshihiro
(Hokkaido University)

はじめに

1964年11月8日から東京で開催された、障害者を対象とした国際的なスポーツ競技会である「国際身体障害者スポーツ大会」の「第一部：第13回国際ストーク・マンデビル競技大会」(以下、東京パラリンピック大会)¹⁾は、日本における障害者スポーツの重要な起点の一つとして位置づけられている。このような位置づけは、既存の歴史研究の蓄積²⁾によって確立された成果の一つである。しかしながら、東京パラリンピック大会を対象とした歴史研究をさらに推進していくためには、資料的な課題があることが指摘されている³⁾。この課題の一つが映像資料の発掘である。管見の限りでは、NHKが放映したテレビ映像(ニュース映像)を主な資料として分析した資料研究があるのみである⁴⁾。ただし、現在視聴可能な東京パラリンピック大会に関するテレビ映像資料には、音声(ニュース原稿を含む)が記録・保存されていない。そのため、音声が含まれた映像資料として、記録映画の発掘が優先度の高い課題であると考えられる。一方で、記録映画のような視聴覚資料の分析

は、東京パラリンピック大会に関する文書資料を補完するだけでなく、現在の障害者スポーツについて考え、さらに今後進むべき方向を考究する際の手掛かりの一助となると考える。

さて、東京パラリンピック大会の報告書によれば、6件の記録映画が自主製作されたことが記されている⁵⁾。列記されたタイトル、フィルムの種類、時間、製作機関をそのまま示せば、次の通りである。①「愛と栄光の祭典」(白黒、時間未記入、大映系)、②「パラリンピック東京大会」(白黒、45分、NHK)、③「パラリンピック」(カラー、30分、ブローパー時計)、④「リハビリテーション」(フィルム種類と時間未記入、学習研究社)、⑤「パラリンピック」(白黒、15分、東京都)、⑥「東京パラリンピック」(カラー、30分、箱根療養所・厚生省)。しかしながら、これらの中で保存が確認されているものは、管見の限り①と②である⁶⁾。

そこで、本研究は、保存が確認されている2つの記録映画である「愛と栄光の祭典」および「パラリンピック東京大会」の内容を分析し研究資料として提示することを目的とする。その際、社会あるいは家族における障害者の立ち位置、パリ

ンピックの意味、障害者スポーツの意味、という3つの視点から分析を試みる。

分析手順は、次の通りである。まず、映像分析については、記録映画をフレーム単位で確認し、ショット単位で内容を記述した上でシーンに分類し、映像の特徴を明らかにする。ここでは、映像データを構成する最小単位をフレーム（静止画像）、フレームから構成される切れ目なしに撮影された映像データをショット、単独あるいは複数のショットから構成される映像データをシーン（場面）とする⁷⁾。

次に、言語音声分析については、ナレーションやインタビューなどの言語音声⁸⁾をすべて文字に起こし、計量テキスト分析⁹⁾による結果を参考としつつ、本研究の内容分析視点を踏まえて、その特徴を明らかにする。ここでは、テキスト型（文章型）データを統計的に分析するためのフリーソフトウェアである「KH Coder」¹⁰⁾を使用して計量テキスト分析を行ない、この分析から抽出される「頻出語」と、出現パターンに似通った語（共起）の程度が強い語を線で結んだ「共起ネットワーク」の結果を参考としつつ、本研究の内容分析視点を踏まえて特徴的な言葉を選定する。そして、選定された言葉の前後の文脈を考察することで、音声言語を特徴づける。必要に応じて、KH Coderによる分析からでは抽出されないが、本研究の内容分析視点から重要であると判断した言葉を選定し、選定された言葉の前後の文脈を考察することで、音声言語の特徴を補足的に説明する。

最後に、映像分析と言語音声分析の作業を統合して、それぞれの記録映画の特徴を明らかにする。

1. 「パラリンピック東京大会」 (NHK厚生文化事業団)

(1) 概要

「パラリンピック東京大会」には日本語版と英語版¹¹⁾がある。本稿ではNHKアーカイブスが所蔵する日本語版を分析対象とした¹²⁾。オープニングクレジットによれば、「制作」はNHK厚生文化

事業団であり、「協力」として日本放送協会が示されている。制作年は、エンディングクレジットの著作権表示から1965年と判断されるが、月日までは不明である。筆者が確認し得た映像時間は44分37秒29フレーム（1秒=30フレーム）であり、言語音声は選手宣誓を除いてすべてナレーションによるものである。以下に、映像の特徴と言語音声の特徴を提示する。

(2) 映像分析とその特徴

まず、映像をショット単位でカウントした。その結果、439ショットとなり、平均値は約183フレーム（約6.1秒）、最小値は36フレーム（1秒6フレーム）、最大値は1,537フレーム（51秒7フレーム）であった。次に、内容によって映像を分類した。分類した結果、19のシーンを設定できた。表1は、小分類を含む各シーンのショットとフレームのそれぞれの数と割合（%）を示したものである。映像全体に占めるフレーム数の割合（%）がショット数の割合（%）よりも高い場合は、シーン当りの時間が長いことを意味する。

シーン11（表1）の「競技」は、全体に占めるショットの割合が約33%、同じくフレームの割合が約38%となっており、全19シーンの中でそれぞれ最も大きな割合を占めている。つまり、「パラリンピック東京大会」における映像の中心は競技場面であったと把握できる。少なくとも、障害者スポーツとはどのようなものが視覚的に理解できるような構成であった、と言える。次に、表1とは別に、映り込みを含む日本人選手の映像を析出すると57ショット、全439ショットに対する割合は12.98%であるのに対して、外国人選手の映像は240ショット、全439ショットに対する割合は54.67%となっている¹³⁾。外国人選手については、普段の様子から競技に至るまで広範に把握できる構成となっている。ただし、これらはあくまで映像データのみから判断される特徴であり、次項の言語音声の特徴を含めて捉える必要がある。

あわせて、崎田による研究で使用されたNHK放映のテレビ映像（ニュース映像）と「パラリン

表1 「パラリンピック東京大会」の映像分析結果

	シーン内容	ショット		フレーム	
		数	%	数	%
1	タイトル	3	0.68	596	0.74
2	外国人選手の到着と会場への移動 ・昼間に羽田空港に到着した外国人選手 (13) ・夜間に羽田空港に到着した外国人選手 (12)	25	5.69	4,705	5.86
3	日本人選手の準備と会場への移動 ・国立別府病院での日本人選手の練習 (9) ・羽田空港に到着し会場へ移動する日本人選手 (11)	20	4.56	3,148	3.92
4	寄付金募集イベント	10	2.28	1,209	1.50
5	日本選手団の結団式	9	2.05	1,142	1.42
6	選手村事務所と会場準備	12	2.73	1,500	1.87
7	選手村での生活 ・自衛隊員の補助 (7)・食堂の様子 (4) ・宿舎での生活 (8)・会場の清掃作業 (3) ・練習の様子 (8)・ボランティア等との交流 (7) ・選手同士の交流 (5)・ボランティア等との交流 (5) ・小学生との交流 (2)・選手同士の交流 (4)	53	12.07	9,663	12.03
8	障害者の生活に関するアドバイスを受ける研究者	7	1.59	1,829	2.28
9	選手歓迎レセプション	10	2.28	1,439	1.79
10	開会式	41	9.34	9,236	11.47
11	競技 ・陸上〔トラック〕(11)・陸上〔フィールド〕(36) ・バスケ (19)・卓球 (14)・スノーカー (6) ・ウェイトリフティング (10)・フェンシング (21) ・水泳 (10)・ダーチャリー (5)・洋弓 (11)	143	32.57	30,160	37.54
12	車いすの修理	9	2.05	1,280	1.59
13	皇室関係者	9	2.05	961	1.20
14	表彰式	11	2.51	2,507	3.12
15	選手村での生活〔競技終了後〕	34	7.74	4,037	5.02
16	閉会式	13	2.96	2,678	3.33
17	外国人選手の帰国前の様子	12	2.73	1,568	1.95
18	外国人選手の帰国の様子	17	3.87	2,383	2.97
19	メッセージ「さあこれからだ!」と著作権表示	1	0.23	298	0.37
	合計	439	100.00	80,339	100.00

(注) シーン内容中の丸括弧内は小分類のショット数を示す。
シーン内容による分類を行ったため、表の順番は必ずしも映画の内容の展開に沿っているわけではない。

ピック東京大会」の映像を比較した¹⁴⁾。その結果、確認できる範囲内であるが、NHKのテレビ映像と記録映画との間で一致するショットが161あり、これは記録映画全439ショットの36.67%を占めている。このことは、ニュース映像の一部を転用して記録映画が作成されたことを示していると考えられる。一方で、現在視聴不能なNHKのテレビ映像が6件（17分36秒）あることから¹⁵⁾、記録映画の映像が、視聴不能なNHKテレビ映像を補完する資料として位置づけられる可能性がある。

(3) 言語音声分析とその特徴

ここではまず、文字化したすべての言語音声

データにおける日本語部分（分析対象ファイル）をKH Coderに読み込ませ、メニューの「前処理→前処理の実行」を実行してデータの単純集計を行なった。その結果、分析対象ファイルに含まれているすべての語の延べ数である「総抽出語数」は4,466、総抽出語からどのような文章にでも現れる助詞や助動詞などを除き、KH Coderでの次の分析に使用する語に絞った「総抽出語数（使用）」は1,813であった¹⁶⁾。また、何種類の語が含まれているのかを示す「異なり語数」は1,134、先ほどと同様、KH Coderでの次の分析に使用する「異なり語数（使用）」は931であった。

次に、KH Coderのメニューから「ツール→抽

出語→抽出語リスト」を実行して、抽出語リストを作成した。その際、KH Coderのデフォルトでは、分析の対象となる「異なり語数（使用）」（ここでは931語）から、「名詞B、動詞B、形容詞B、副詞B、否定助動詞、形容詞（非自立）」を除外して、リストを作成する設定になっている¹⁷⁾。このデフォルトのまま作業を進めた結果、845語からなる頻度降順による抽出語リストが得られた。ここでは、このリストで示された出現回数4回以上の70語（845語の8.28%）を、頻出語と定義した。ちなみに、出現回数3回の語数は53、同じく2回の語数は147、同じく1回の語数は575であった。

頻出語の結果を表2、共起ネットワークの結果を図1に示す。そして、分析結果により抽出された言葉を参考にしつつ、本研究の内容分析視点（社会あるいは家族における障害者の立ち位置、パラリンピックの意味、障害者スポーツの意味）を踏まえて特徴的な言葉を選定する。そして、選定された言葉の前後の文脈を考察することで、音声言語を特徴づける。

まず、表2および図1、そして社会における障害者の立ち位置という分析視点から、外国人選手と日本人選手とについて、「明るい」と「喜び」

という言葉を含む文脈を確認してみたい。外国人選手については、次のとおりである。「スポーツの楽しさ、厳しさ、そして生きる喜びを私達に示してくれた外国選手たちは・・・」、「たくましい体力、気迫に満ちた闘志、そして底抜けの明るさは、日本選手たちにも大きな希望と社会復帰への勇気を与えてくれました」、「日本の身体障害者一人ひとりに、あの外国選手のような明るい笑顔がよみがえるとき、はじめて本当のパラリンピックが始まると言えるのです」。このように、社会復帰を果たし社会的に自立していることを前提に、スポーツを通じて体力、闘志を獲得し、その結果として外国人選手の笑顔が「明るさ」の象徴として強調されている。一方で、日本人選手については、次の通りである。「今は大会に参加できた喜びで、誰もがいっぱいようです」、「不自由な身体と乏しい施設での練習は決して楽なものではありません。しかし、自分たちもやればできるのだという喜びが、一人ひとりの顔に浮かんでいます」。これらに加えて、最終シーンに示された「さあこれからだ!」という文字のみの静止画を含めて勘案すれば、日本の障害者にとってスポーツが新たな生活の糸口となる可能性があるという意味での「喜び」、となっている。

表2 「パラリンピック東京大会」の言語的音声の頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
パラリンピック	22	下半身麻痺	7	顔	5	国旗	4
外国選手	22	言葉	7	喜び	5	始まる	4
競技	21	手	7	激しい	5	試合	4
人	18	明るい	7	参加	5	社会復帰	4
車いす	16	陸上フィールド	7	宿舎	5	種目	4
日本選手	14	練習	7	障る	5	水	4
フェンシング	13	腕	7	食堂	5	水泳	4
選手村	13	筋肉	6	正確	5	選ぶ	4
各国選手	12	訓練	6	選手	5	贈る	4
行う	12	皇太子	6	体力	5	代表	4
日本	12	行進	6	動き	5	卓球	4
スポーツ	11	乗る	6	グットマン博士	4	年	4
終わる	11	殿下	6	チーム	4	拍手	4
大会	11	投げる	6	リハビリテーション	4	奉仕	4
身体障がい者	8	夫妻	6	希望	4	目	4
力	8	イギリス	5	見る	4	優勝	4
オリンピック	7	スタンド	5	国	4	陸上トラック	4
バスケットボール	7	開会	5				

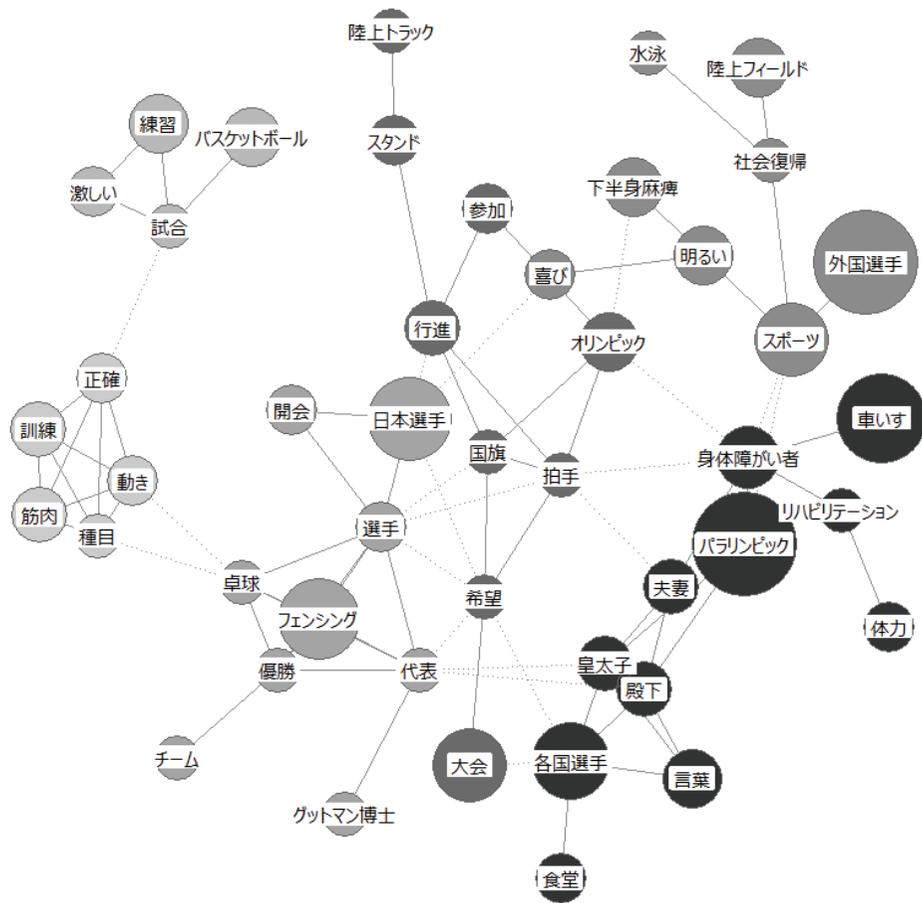


図1 「パラリンピック東京大会」における言語音声の共起ネットワーク

次に、表2および図1、そしてパラリンピックの意味という分析視点から「パラリンピック」を含む文脈を確認してみたい。パラリンピックに関する説明を除けば、「地上に描いた丸い標的を狙う（槍）正確投げ・・・いかにもパラリンピックらしい種目の1つです」（括弧内引用者）、「パラリンピックらしい競技の1つ、スヌーカー、玉突きです」、「オリンピックの花がマラソンならば、パラリンピックの花はバスケットボールだと言えましょう」とあるように、独自の競技種目を含む競技スポーツ大会として位置づけられている。また、「パラリンピックに寄せられた皇室のご関心は誠に深く、皇后陛下も皇太子殿下ご夫妻と共にバスケットボールと洋弓をご覧になりました」、

あるいは「食堂に奉仕する女性たちも、外国選手たちの仲間入り。スポーツは国境を越えて、誰とでもすぐ打ち解けた気分させてくれます」とあるように、大会が皇室関係者やボランティア等によって支えられていたことが語られている。

最後に、表2および図1、そして障害者スポーツの意味という分析視点から、身体障害者の「スポーツ」と「リハビリテーション」についてみてみたい。「身体障害者のスポーツは、あくまで障害の種類や程度に応じてその人の体力に適したものをを選び指導していかなくては、リハビリテーションの正しい目的を達成することができない」と語られている。このことを踏まえて、競技種目の文脈を確認してみると、「水泳は下半身麻痺の

障害者にとって最も理想的なスポーツだとも言われています」、卓球は身体全体のバランス、反射的な筋肉の動きを訓練するのに役立ちます」、
「フェンシングも卓球などと同じように動きの早いもので、やはり反射神経の鍛錬に適した競技」、
「(投擲種目については)腕の力だけでなく肩、背中、腹と全ての筋肉を総合的に強めて、いろいろな姿勢に即座に適応できる能力を養う事を狙いとしています」(括弧内引用者)、というように機能改善に関することが説明されている。一方で、重量挙げについては「特別な訓練を受けた者でなければ参加できないことになっています」、あるいはバスケットボールは「誰がやっても良いというものではありません。そこには十分な医学的な管理と考慮がなくてはならないのです」とあるように、すべての競技スポーツ種目が日本の障害者にとって最適なりハビリテーションになるわけではないことが付言されている。補足的に、KH Coderによる分析からでは抽出されないが、本研究の障害者スポーツの意味という視点から重要であると判断した言葉として、「記録」を含む文脈を確認してみる。「記録が伸びることが、それだけ自分自身の生活能力、職業能力が伸びたことになる」とあり、障害者にとってのスポーツは、記録・技術の向上が競争相手との勝負というより、生活・職業能力の向上を志向していることが語られている。

(4) 小括

以上の映像分析と言語音声分析を踏まえて、「パラリンピック東京大会」の記録映画としての特徴を確認しておきたい。

まず、映像の中核となっているのは競技場面であり、障害者スポーツが視覚的に理解できるような構成であった。この点について、言語音声上は「パラリンピック」を独自の競技種目を含むスポーツ大会として位置づけ補完している。一方で、各種競技種目はリハビリテーションの観点からも説明され、記録・技術の向上と生活・職業能力の向上が結びつけて語られている。障害者がス

ポーツをすることに対する認識が十分に浸透していなかった日本において、丁寧な説明がなされたと考えられる。

次に、映像においては、外国人選手の生活の様子が把握できるように構成されている。この点について、言語音声では、外国人選手が社会復帰を果たし社会的に自立していること、その手段の一つとしてスポーツがあるという語りで補完している。外国人選手の笑顔に象徴される「明るさ」が、日本人選手だけでなくすべての日本の障害者にとって希望となることが提示されたと考えられる。

2. 「愛と栄光の祭典」(日芸総合プロ)

(1) 概要

「愛と栄光の祭典」は1965年5月に一般公開された記録映画である。本稿では株式会社KADOKAWAが所蔵する映像を分析対象とした¹⁸⁾。「製作」は日芸総合プロの上原明、「監督・脚本・撮影」が渡辺公夫、「音楽」が団伊玖磨、「解説」が宇野重吉、「協力団体」として厚生省と財団法人国際身体障害者スポーツ大会運営委員会が記されている。また、「配給」は大映株式会社であり、文部省選定および東京都推奨映画に指定されている¹⁹⁾。なお、渡辺は監督第一作としてこの映画に取り組んでいる²⁰⁾。筆者が分析した映像時間は62分36秒²¹⁾であり、音声はナレーションに加えて、日本人選手によるインタビューなどの音声が含まれている。以下に、映像の特徴と音声の特徴を提示する。

(2) 映像分析とその特徴

まず、映像をショット単位でカウントした。その結果、1,241ショットとなり、平均値は約91フレーム(約3秒)、最小値は10フレーム、最大値は918フレーム(30秒18フレーム)であった。次に、内容によって映像を分類した。分類した結果、22のシーンを設定できた。表3は、小分類を含む各シーンのショットとフレームのそれぞれの数と割合(%)を示したものである。

冒頭のシーン2（表3）は東京オリンピック大会に関する映像であり、ショット数で全体の約11%を、フレーム数で同じく約8%を占めている。そのため、東京オリンピック大会と比較するかたちで東京パラリンピック大会が位置づけられていることが、映像から把握できる。次に、シーン18の「競技」がショット数で全体の約25%を、フレーム数で同じく約21%を占めている。このことは、「愛と栄光の祭典」では、視覚的には競技場面が一定程度使用された、と確認できる。最後に、特定の日本人選手に焦点が当てられていることがわかる。選定の理由は判然としないが、井上千代乃と小笠原文代は卓球ダブルス（C級）の銅

メダリストであり女性、松本毅はアーチェリーのアルピオン（団体）とFITA（団体）で銀、ダーチャリーペア（オープン）の銅メダリストであり最年長選手であった²²⁾。このように、有力選手であり、年齢や性別的な特徴から焦点が当てられた可能性が考えられる。

一方で、表3とは別に、各日本人選手の映り込みおよび関連する映像を析出すると、小笠原文代（陸上競技、卓球、水泳）が全1,241ショット中106ショット（8.54%）、井上千代乃（卓球）が同じく46ショット（3.71%）、杉浦文明（陸上競技）が同じく43ショット（3.46%）、内田佳助（アーチェリー、陸上競技、水泳、卓球）が同じく29ショッ

表3 「愛と栄光の祭典」の映像分析結果

シーン番号	シーン内容	ショット		フレーム	
		数	%	数	%
1	配給会社ロゴ	3	0.24	634	0.56
2	東京オリンピック大会の成功から普段の生活へ ・街並み (32)・会場の様子 (24)・熱戦 (21) ・終焉 (12)・大会後の様子 (30)・無人の競技場 (16)	135	10.88	9,225	8.20
3	タイトル、オープニングクレジット	4	0.32	874	0.78
4	公園の片隅に貼られたパラリンピックのポスター	4	0.32	430	0.38
5	身体障害者の状況 ・身体的障害を誘因する状況 (30) ・身体障害者の訓練や職業 (11) ・リハビリとしてのスポーツ (11)	50	4.03	3,700	3.29
6	出場選手のパラリンピック大会に至る経緯 ・井上千代乃 (24)・松本毅 (14)・内田佳助 (12) ・小笠原文代 (31)・杉浦文明 (11)	92	7.41	11,283	10.02
7	飲食店での募金	18	1.45	1,662	1.47
8	空港に到着する選手と関係者	55	4.43	5,450	4.84
9	杉浦の壮行会から汽車での移動	15	1.21	2,580	2.29
10	日本人選手の県市での壮行会からバスでの移動	79	6.37	5,850	5.20
11	選手村での外国人選手の様子	80	6.45	7,975	7.08
12	選手村での日本人選手の様子ほか	36	2.90	3,351	2.98
13	小笠原とその子どもたち	27	2.18	5,194	4.61
14	会場設営の様子	13	1.05	821	0.73
15	開会式当日の準備	23	1.85	1,968	1.75
16	開会式	142	11.44	14,021	12.46
17	式後の様子	20	1.61	1,760	1.56
18	競技 ・バスケ (13)・陸上〔フィールド〕(105) ・スノーカー (11)・フェンシング (22)・水泳 (32) ・陸上〔トラック〕(48)・洋弓 (21)・卓球 (40) ・ウェイトリフティング (13)	305	24.58	23,352	20.74
19	表彰式	34	2.74	2,194	1.95
20	インターナショナルクラブの様子	25	2.01	1,304	1.16
21	閉会式	75	6.04	6,480	5.76
22	エンディング・エンドロール	6	0.48	2,459	2.18
合計		1,241	100.00	112,567	100.00

(注) シーン内容中の丸括弧内は小分類のショット数を示す。

シーン内容による分類を行なったため、表の順番は必ずしも映画の内容の展開に沿っているわけではない。

ト（2.34%）、松本毅（アーチェリー）が同じく21ショット（1.69%）、となっている。とりわけ、小笠原については、離れて生活していた子どもたちと東京パラリンピック大会を契機に再会するショットなども含まれている。小笠原の子どもたちのみに関する映像は全1,241ショット中46ショット（3.71%）あり、選手宣誓をした青野繁夫が同じく36ショット（2.9%）、トレーナーとして参加した中川一彦が同じく13ショット（1.05%）であることを考えれば、多く取り上げられていると判断される。

（3）言語音声分析とその特徴

ここではまず、文字化したすべての言語音声データにおける日本語部分（分析対象ファイル）をKH Coderに読み込ませ、メニューの「前処理→前処理の実行」を実行してデータの単純集計を行なった。その結果、分析対象ファイルに含まれているすべての語の延べ数である「総抽出語数」は3,528、総抽出語からどのような文章にでも現れる助詞や助動詞などを除き、KH Coderでの次の分析に使用する語に絞った「総抽出語数（使用）」は1,330であった²³⁾。また、何種類の語が含まれているのかを示す「異なり語数」は939、先ほどと同様、KH Coderでの次の分析に使用する

「異なり語数（使用）」は722であった。

次に、KH Coderのメニューから「ツール→抽出語→抽出語リスト」を実行して、抽出語リストを作成した。その際、KH Coderのデフォルトでは、分析の対象となる「異なり語数（使用）」（ここでは722語）から、「名詞B、動詞B、形容詞B、副詞B、否定助動詞、形容詞（非自立）」を除外して、リストを作成する設定になっている²⁴⁾。このデフォルトのまま作業を進めた結果、599語からなる頻度降順による抽出語リストが得られた。ここでは、このリストで示された出現回数3回以上の67語（599語の11.19%）を、頻出語と定義した。ちなみに、出現回数2回の語数は93、同じく1回の語数は439であった。

頻出語の結果を表4、共起ネットワークの結果を図2に示す。そして、分析結果により抽出された言葉を参考にしつつ、本研究の内容分析視点（社会あるいは家族における障害者の立ち位置、パラリンピックの意味、障害者スポーツの意味）を踏まえて特徴的な言葉を選定する。そして、選定された言葉の前後の文脈を考察することで、音声言語を特徴づける。

まず、表4および図2、そして家族における障害者の立ち位置という分析視点から、「自分」を含む文脈を確認してみると、これは日本人選手の

表4 「愛と栄光の祭典」の言語的音声の頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
思う	13	病気	5	身体障害者	4	子ども	3
パラリンピック	12	この人	4	多く	4	持つ	3
自分	12	なんか	4	待つ	4	社会復帰	3
身体	10	スポーツ大会	4	道	4	手	3
精神	10	運動	4	年	4	障害	3
お母さん	8	感じる	4	頼る	4	心から	3
脊髄損傷	8	頑張る	4	ほら	3	人達	3
オリンピック	7	希望	4	ストークマンデビル	3	杉浦	3
サトミ	7	帰る	4	スポーツ	3	宣告	3
皆さん	7	言う	4	開会	3	選手	3
今	7	考える	4	外国選手	3	早い	3
人	6	行く	4	弓	3	足	3
病院	6	国際	4	金メダル	3	日本	3
一番	5	今日	4	苦しい	3	不自由	3
怪我	5	残る	4	見る	3	抱っこ	3
国	5	子	4	皇太子	3	明るい	3
参加	5	治る	4	国際身体障害者	3		

次に、表4および図2、そしてパラリンピックの意味という分析視点から、「参加」あるいは「頑張る」を含む文脈を確認してみると、これらは壮行会や激励会での日本人選手に贈る言葉の中で多く用いられている。このような期待に対して、日本人選手自身はどのような思いであったのか確認してみたい。上記の家族に対する語りも東京パラリンピック大会参加を動機づける背景の一つとなっているが、より直接的な参加動機に関する言及もみられる。たとえば、井上は「外国人選手のそういう実態を見たい」、杉浦は「僕の考え方と彼らの考え方いろんな意味で交換したい」、青野は妻から長生きすることを切望されて運動を始めた結果、「おもしろいじゃないかということでも・・・、そんなじゃあパラリンピックにできるように努力しよう」、松本は「弓だったら普通の社会の人と同じように、ハンデなしでやれますからね、これが一番私には向いている運動だと思わせてね」と述べている。一方で、井上や杉浦は「金メダルとかそういうんじゃない」あるいは「メダルなんか取れないと思いますけど」と語り、ナレーションでは「心の金メダル」という用語を使用している。

最後に、表4および図2、そして障害者スポーツの意味という分析視点から、「社会復帰」および「明るい」を含む文脈を確認したい。ここでは、話者不明であるが、外国人選手の明るさについて「社会福祉制度の違いじゃないですかね。われわれの場合、年金が月1,800円でね。イギリスあたりは80%以上が社会復帰して、立派に税金を納めているという話なんですよ。それに比べて日本の場合ですね、われわれは税金を食ってる」と述べている。関連して「年金」を含む部分について、杉浦は「僕の考えでは今労働力不足なんて言われてますけど、そういう意味でも、もっと僕らの残ったエネルギーというものをもっと引っ張りだしてくれれば、僕らにとっていいし、年金だけくれるよりも、国にとっても、その人たちに働かせた方が得なような気がすんですよ」と提言している。このように、障害者としての生活に対

する見解や要望が述べられている。換言すれば、東京パラリンピック大会を機に顕在化した社会的な課題を、日本人選手が代弁している、と把握することもできよう。ただし、女性である井上は、「パラリンピック終って・・・自分できることやってみたいと思うんですけどね、・・・まだそこまで決めてない」との心情を吐露している。

(4) 小括

以上の映像分析と言語音声分析を踏まえて、「愛と栄光の祭典」の記録映画としての特徴を確認しておきたい。

まず、視覚的には競技場面が一定程度（ショット数で全体の約25%）採用されている。しかしながら、ナレーションを含めた言語音声上は競技内容には全く触れられていない。また、競技シーンにおいては日本人選手の映像が多く、自身の競技シーンを背景に、それぞれの思いを語った音声が入り込んでいる。

次に、映像構成上、東京オリンピック大会と比較するかたちで東京パラリンピック大会が位置づけられている。このことは、ナレーションにおいても「ここにひっそりと忘れられているもう一つの五輪・・・それがパラリンピック」と解説し、最後に「あらゆる障害を乗り越えて社会に復帰できるその時が、そして理想郷建設が一日も早く来るように、明るく暖かく愛し合い助け合って前進しよう。それは、心の金メダルへの道であり、愛と栄光への道でもある」と締めくくっている。

最後に、小笠原とその家族の動向は、記録映画を物語としてみたときの主要な内容となっていたと考えられる²⁵⁾。特に、東京パラリンピック大会を機に母子として久しぶりに再会した時のシーンは、会話もそのまま収録されており印象に残る内容となっている。

おわりに

本研究の目的は、東京パラリンピック大会の記録映画である「パラリンピック東京大会」および「愛と栄光の祭典」の内容を分析し、研究資料と

して提示することであった。具体的には、記録映画の映像部分と言語音声部分を区分して分析し提示するとともに、両者の特徴を踏まえて総合的に考察することを試みた。このような方法を採用したのは、写真を含む映像資料および報告書や新聞などの文書資料との比較に供することも念頭に置いたためである。最後に、本研究の成果と課題に言及して、まとめにかえる。

まず、本研究で対象とした記録映画である「パラリンピック東京大会」と「愛と栄光の祭典」は、既存の研究において分析や考察がなされていないという意味で、未見の資料として位置づけられる。また、前者が公共放送機関のNHKが製作に協力したのに対し、後者は映画会社が関与し公開されている、という点で対照的である。そして、今後さらなる記録映像が発掘された際の好個な比較資料となりえよう。

次に、本研究で取り上げた二つの記録映画を比較する形で、その特徴を解説すれば以下になる。 「パラリンピック東京大会」は、外国人選手を中心として競技場面を網羅的に取り上げ、リハビリテーションの観点から障害者スポーツに言及している。日本人選手の参加割合からすれば公平な取り上げ方であると判断される。それに対して、「愛と栄光の祭典」では、特定の日本人選手の準備から競技参加を取り上げ、それぞれに異なる背景と思いが深く掘り下げられている。

また、本論では指摘し得なかったが、「パラリンピック東京大会」と「愛と栄光の祭典」では、皇室関係者の取り上げ方が異なる。少なくとも前者の方が映像として多く取り上げている。一方で、二つの記録映画には共通点も多い。東京パラリンピック大会が今後の障害者スポーツの起点となること、外国人選手の明るさ、車いすが特別ではないこと、などである。

今後の課題は以下の通りである。まず、「パラリンピック東京大会」については、参加した国と地域別に映像割合を明らかにする必要がある。一方で、「愛と栄光の祭典」については、文書資料等から選手の背景や思いを補完する必要がある。

本研究で指摘した二つの記録映画の特徴は、映像データと、言語音声文字化したデータとから導かれた一つの特徴に過ぎない。膨大な情報量を含む記録映画について、さらなる知見や製作側が意図していない情報の掘り起しは必須である。追試分析を含め障害者スポーツを研究対象としている研究者との連携的作業が求められる。

注および引用・参考文献

- 1) 1964年の段階において、「国際身体障害者スポーツ大会」は、11月8日から12日までの「第一部：第13回国際ストーク・マンデビル競技大会」と、11月13日から14日までの「第二部：身体障害者スポーツ大会」に区分されている。「国際身体障害者スポーツ大会」は、当時の日本における公文書上の正式名称である。また、「東京パラリンピック大会」は、複数あった通称の一つである。なお、1989年以降、「第一部：第13回国際ストーク・マンデビル競技大会」が「第2回パラリンピック夏季大会」と位置づけられている。本稿では、記録映画が作成された「第一部：第13回国際ストーク・マンデビル競技大会」を研究対象としている。崎田嘉寛「東京パラリンピック大会（1964）に関するテレビ放送」『スポーツ史研究』第28号、p.71、81、2015。
- 2) 中川一彦「パラリンピック競技大会の夜明け」『筑波大学体育科学系紀要』第20巻、pp.1-7、1997。蘭和真「東京パラリンピック大会と障害者スポーツ」『東海女子大学紀要』第22巻、pp.13-23、2000。小倉和夫「1964東京パラリンピックが残したもの」『日本財団パラリンピック研究会紀要』第1号、pp.5-23、2015。
- 3) 崎田「東京パラリンピック大会（1964）に関するテレビ放送」、pp.80-81。
- 4) 同上、pp.71-83。
- 5) 財団法人国際身体障害者スポーツ大会運営委員会『パラリンピック東京大会報告書』

- 1965、p.173。なお、東京パラリンピック大会の公式記録映画は、「費用の一切をスポンサーの協力を期待して企画をすすめたが、資金の獲得ができなかったため、運営委員会としての作品を製作することができなかった」（同書、p.173）と記されている。
- 6) ①「愛と栄光の祭典」は、2014年11月3日に江戸東京博物館で上映された記録が残されている。また、2016年9月14日にNHK総合で放送された「NHKアーカイブス」で②「パラリンピック東京大会」の日本語版の一部が放送され、同7日にはNHK総合「おはよう日本」で英語版が紹介されている。
- 7) 栗山香耶、須藤智ほか「ショットに着目した映像分析支援ツール」情報処理学会『第75回全国大会講演論文集』pp.613-614、2013。
- 8) 記録映画における音声には、言語音声以外に非言語音声（撮影現場での物音や編集によって挿入された音楽）がある。ただし、本研究ではこれらの非言語音声は分析の対象外とした。宮田 章「データから読み解くテレビドキュメンタリー研究」『放送研究と調査』第68巻第4号、pp.16-43、2018。
- 9) 計量テキスト分析とは、「計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析（content analysis）を行う方法である」と定義されている（樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—』ナカニシヤ出版、2014、p.15）。映画を対象として計量テキスト分析を用いた研究として、春木良且、田中弥生ほか「川崎市市政ニュース映画のナレーション分析を用いた映像理解の試み：市民アーカイブス構築のための枠組みとして」『言語資源活用ワークショップ発表論文集』第2巻、pp.239-251、2017、がある。
- 10) 同上、樋口。
- 11) 英語版のタイトルは「PARALYMPIC TOKYO」である。ほとんどの映像が日本語版と同じであり、ナレーションも日本語を英語に翻訳したものである。
- 12) NHKアーカイブス学術利用トライアル2016年度第4回を活用し、2016年12月20日から22日、2017年1月24日から26日、同年2月21日から23日に、NHK放送博物館において「パラリンピック東京大会」の映像を視聴した。なお、以下に示すフレーム数のデータは、NHKアーカイブスに設置された機材のカウンターから得たものである。また、すでにデジタル化された映像であったため、オリジナルフィルムフレームレートは不明である。
- 13) 日本人選手は53名が参加しており、全参加選手（378名）に占める割合は約14%である。
- 14) 前掲12) で示した期間に、崎田「東京パラリンピック大会（1964）に関するテレビ放送」で示されたニュース映像との比較を行なった。
- 15) 崎田「東京パラリンピック大会（1964）に関するテレビ放送」、pp.76-79。
- 16) KH Coderはデフォルト（初期状態）では、動詞・名詞のような内容語だけを分析対象として扱い、助詞や助動詞のような機能語はすべて無視する仕様となっている（樋口耕一「言語研究の分野におけるKH Coder活用の可能性」『計量国語学』31巻1号、pp. 36、38、2017）。
- 17) KH Coderのメニューから「ツール→抽出語→抽出語リスト→フィルタ設定」とたどった最終画面を参照のこと。なお、「名詞B、動詞B、形容詞B、副詞B、否定助動詞、形容詞（非自立）」の内容とこれらの品詞を除外することの意味については、次の文献を参照のこと。前掲9) 樋口、pp.110-111。
- 18) 株式会社KADOKAWAが所蔵する営業用ブルーレイディスクの閲覧許可を受けて、2017年8月に「愛と栄光の祭典」の映像を視聴した。なお、以下に示すフレーム数のデータは、SONY社の映像編集ソフトウェアVEGAS PRO 13から得たものである。また、すでにデジタル化された映像であったため、オリジ

ナルフィルムのフレームレートは不明である。

- 19) 「愛と栄光の祭典」には、いくつか評論が存在する。たとえば、「この映画は、パラリンピックを通して、身体障害者に対する一般の理解と愛情を強めようとした作者の意気込みがひしひしと感じられる」（著者不詳「愛と栄光の祭典」『キネマ旬報』第392号、p.94、1965）、「単にパラリンピックを知るだけでなく、身体障害者への愛情を深めるためにも、…（中略）…大いに讃えられてよいし、できるだけ多くの人に見せたいものである」（大内秀邦「愛と栄光の祭典」『視聴覚教育』第19巻第5号、p.96、1965）と評価されている。その一方で、「劇的な効果よりも記録性に重点をおいてまとめた方が感銘深かったのではないか」（著者不詳、同前、p.94）、「作者の主観が強く出すぎているあたりに難がある」（大内、同前、p.96）とも述べられている。
- 20) 「パラリンピックも記録映画に」『東京朝日新聞夕刊』1964年10月26日、p.5。「人」『東京朝日新聞』1964年10月29日、p.2。
- 21) SONY社の映像編集ソフトウェアVEGAS PRO 13を用いて閲覧したが、フレーム総数は112,567フレームとなり、誤差が-113フレーム（-3秒23フレーム）ある。ただし、これらの誤差の総フレーム数（112,567）と総時間数（62分36秒）とに対する割合は、それぞれ0.001%と0.001%であり、分析結果への影響は極めて少ないものと判断した。
- 22) 各競技の種目およびクラスは、以下を参照。財団法人国際身体障害者スポーツ大会運営委員会『パラリンピック東京大会報告書』1965、pp.212-228。なお、映像からでは、これらの種目やクラスの詳細は判然としない。ただし、中村によれば、卓球Cクラスは「Th₁₀またはそれ以下の麻痺」と分類されている。また、アーチェリーのアルピオン（団体）は不明であるが、FITA（団体）は国際弓道連盟ラウンド（男子：90m、70m、50m、30m、

各距離36本）と記されている。さらに、ダーチャリーとは「吹き矢でするゲームを身障者スポーツ向きに変え、弓で行なうようにかえたもので13.7mの距離から2人で1組になって競技する」と説明されている（中村裕、佐々木忠重『身体障害者スポーツ』南江堂、1964、p.152、158）。

23) 前掲16) 参照。

24) 前掲17) 参照。

25) 「愛と栄光の祭典」のポスターに示されたキャッチコピーには「投げた！勝った！笑った！絶望したあの体の母さんが、ホラ泣いてる、笑ってる！」とある。ここでの「母さん」は小笠原のことを指していると考えられる。

〔付記〕

本研究は、NHKアーカイブス学術利用トリアル2016年度第4回「東京パラリンピック大会（1964）映像の意義」の成果の一部である。

〔謝辞〕

記録映画「愛と栄光の祭典」を利用するにあたり、株式会社KADOKAWAの五影雅和氏には多大な協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

（2019年8月2日受付）
（2020年1月24日受理）